シェクスピアの世界　Ⅱ

ロミオとジュリエット

目　次

序　ロミオとジュリエット
一、　仮面舞踏会
二、　恋に落ちて
三、　恋と愛
四、　月夜の「窓辺」
五、　喧嘩と追放
六、　一つの妙案
七、　悲劇へと
八、　それぞれの人物像
九、　純愛とは
＊　参考文献

ロミオとジュリエット

序　ロミオとジュリエット

例えば、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』という作品は、世界的にも非常に人気の高い「作品」の一つになるかと思うが、それでは、その「作品」の、一体、どこがどのように魅力的だというのだろうか？　そのことについて、少し考えてみたいと思う。

まず、その「内容」の要約であるが、それは、まず、その対立する両家とは、一方は、ロミオ側のモンタギュー家と、もう一方は、ジュリエット側のキャピュレット家である。そして、ロミオの友人には、領主の親戚である「マキューシオ」とモンタギューの甥である「ベンヴォーリオ」とがいる。一方、ジュリエット側には、キャピュレット夫人の甥である「ティボルト」をはじめ、キャピュレット家の使用人である「サムソンとグレゴリ」とがいて、その使用人の二人が最初に街頭にて話をしている。その内容は、「……モンタギューの家（ロミオ側）の者だったら、犬ころ一匹見てもむかっとくるんだ。こんどの喧嘩は、主人同士、俺たち男同士の喧嘩だもんな」と、まさに「一触即発」の状態にあることを観客に分かり易くアピールしている。そこにロミオ側のモンタギューの従僕「エイブラハム」とロミオの召使「バルサザー」とが現われて、街頭で相手側とお互い「口喧嘩」から「剣を抜いて」の争いになっているところに、ロミオの「親友」（ベンヴォーリオ）がやって来て、引け、引け、馬鹿者ども、と、剣を抜いて「止め」に入るが、今度は、ジュリエット側の「ティボルト」も登場して来て、剣を抜いている「ベンヴォーリオ」を見ては、「ティボルト」も剣を抜き、二人とも剣を交えることになる。そこに「警史」（つまり「警察」）がやって来て、剣を抜いて喧嘩している人たちを捕り押さえることになる。

すると、今度は、夜着を着たジュリエットの「両親」（老キャピュレットとキャピュレット夫人）とが登場して来る。そして、「……この騒動はいったい何事だ。さ、わしの長剣を持ってこい！」と叫ぶ。一方、ロミオの「両親」（老モンタギューとモンタギュー夫人）もその場に登場して、「……キャピュレットか！　この悪党め！――さ、手を放せ、とめるな」と、今度は、当人同士が、まさに「一触即発」の状態になってしまう。つまり、両家の「いがみ合い」は、もう「血を見なければ収まらないほど悪化している状態」であることを、はっきりと観客に「明示」（アピール）しているのである。そして、もちろん、このままでは収まらないので、領主エスカラスが従者を連れて登場して来る。そして、「……みんな鎮まれ。お前たちはわたしに向かって謀反を起こす気か！　平和を乱し、その刃を同胞の血で汚して平気なのか！　今後またわが市の平静を乱すことがあれば、治安をおびやかした罪の報いとして両人の命を申しうける。今日のところは、両人以外の者は全員引きとるがよい」ということで、一応収まり、そして、キャピュレットには、自分と一緒に来るように、そして、モンタギューには、午後、裁判所に出頭することを命ずる。

さて、その場にロミオの「両親」（老モンタギューとその夫人）それにベンヴォーリオの三人が残ると、自然とロミオの話になり、彼は、最近、何か悩みを抱えていて、自分だけの世界に深く閉じ籠もっているようだと話をしているところに、ロミオが登場し、モンタギュー夫婦は、その理由をぜひ聞き出してほしいと告げて、退場する。そこで、今度は、ロミオと親友ベンヴォーリオとの「会話」になる。その「会話」のなかで、ロミオは、ある女性に深く惚れ込んでいるのだが、彼女は、貞操堅固なことといったら鎧を着ているのも同然で、いくら甘い睦言をのべて攻めたててもびくともしない。つまり、まったく取

り合ってもらえない状態であり、そのために、ロミオは独り深く悩み苦しんでいるのだと言う。そこで、親友のベンヴォーリオは、その女のことは忘れるのだな。そのためにも、ほかの多くの「美人」を見ることだと進言し、まさに「仮面舞踏会」へと誘うのであった。

一方、ジュリエットは、母親から、実は、領主の親戚にあたる「パリス」という若くて非常にハンサムな貴族との「結婚話」がもち上がっていることを聞かされる。それに対して、ジュリエットは、「……そんな名誉のこと、考えたこともありません。（中略）、相手を見て好きになれるものなら、そうつとめてみましょう。でも、ここまではよいというお母様のお許しが出る限度をこえて、相手の心深く視線の矢を放つつもりはありません」と答える。しかし、ロミオと、まさに「運命的な出会い」をすることによって、その限度を遙かに超えてしまうのである。――ちなみに、ジュリエットは、まだ十四歳にもならない美しい「おぼこ娘」ということになっている。

一、仮面舞踏会

さて、「話」（ストーリー）は、いよいよ『仮面舞踏会』へと進むことになるが、その舞台は、ジュリエット側の、キャピュレット家の「広間」で催され、キャピュレットが、その夫人、ジュリエット、ティボルト、乳母、その他の同家の者を連れて登場。他方より、客人およびロミオ等、仮面をつけた者たち多数登場とある。そして、音楽が演奏され、一同踊り出すこの「舞踏会」で、ロミオとジュリエットは、まさに「運命的な出逢い」をすることになる。まず、ロミオの場合、ロミオが死ぬほど恋い焦がれていたあの麗人も、優しいジュリエットに比べれば、もはやその美は色褪せたも同然。それは、騎手に手をとられているジュリエットの姿を見た時に、「……ああ、なんて美しい女だ！（中略）、あの美しさはもったいなくて手も触れられぬ、立派すぎてこの世のものとも思えぬ！　まるで烏の群れの真ん中に降りた純白な鳩だ。（中略）、踊りがひとしきり終わったら、俺はあの女の所に行って、美しいその手に触れて僕のがさつな手を清めてもらおう。ああ、何としたこと！　俺の心は今まで恋をしていたと言えようか？　僕の目よ、誓いを取り消せ！　俺は、今夜初めて本当に美しい女を見たのだ！」と言う。この「心の状態」は、まさに「一目惚れ」の状態である。しかし、やがて彼女が敵対するキャピュレット家の一人「娘」であることを知ると、少なからず衝撃を受けることになる……。

一方、ジュリエットの場合、ロミオは、巡礼の衣裳を身にまとい、顔には仮面を付けているので、いわゆるロミオのような「一目惚れ」とは少し違う。まず、ロミオがジュリエットの手にふと触れる。（それに驚いた）ジュリエットの前で、「……もし私がこの汚れた手でこの聖い御堂を瀆したとしたら、その罪を願わくは大目に見ていただきたい。汚い手で触れたその場所をそっと接吻して清めようと、二人の恥じろうて赤くなった巡礼のような私の唇が待っております」と言う。それに対して、ジュリエットは、「……巡礼様に申します。こうやって私の手を握り、立派に勤めを果たしたあなたの手を、あんまり詰ってはかわいそう。聖者の像にも手があって、それに手を触れるのが巡礼の勤めというもの、手と手とをぴったりと合わせるのが巡礼の接吻でございましょう」と言う。それに応えて、ロミオは、「……では、聖者にも、巡礼にも唇があるのはなぜでございましょう」と訊く。ジュリエットは、「……祈りのときに用いるための唇でございます」と言う。それに応え

て、ロミオは、「……では聖者様、手で行なう勤めを今度は唇で行なわせてください、私の唇の祈りを聞きいれてください、さもなければ私の信仰も絶望へと変わります」と言う。ジュリエットは、「……祈りに応えて願いを聞きいれても、聖者の像は動きはいたしませぬ」と言う。それに対して、ロミオは、「……では、祈り求めたものをいただきますゆえに、動かないでいてください。こうやって私の罪もこの唇からあなたの唇によって拭い清められました」と言って、ロミオは、ジュリエットに軽く接吻をする。ジュリエットは、「……ああ、私の唇はあなたの唇の罪で汚れてしまいました」と言う。それに対して、ロミオは、「……私の唇の罪で！（中略）、では、その罪を私に戻していただきましょう」と言って、もう一度、今度は少し強めに接吻をする。ジュリエットは、その少し強めの接吻を受けて、「……礼儀正しい接吻ですこと」と言うのであった。

さて、このロミオの「接吻」の仕方、最初は、軽めの「接吻」をするが、それは、挨拶程度の、また、相手の反応を伺う程度のものであるが、一方、ジュリエットは、この「接吻」が一体どういう意味を持つ「接吻」なのかを計りかねているところに、もう一度、今度は、少し強めの「接吻」をすることにより、ロミオは、自分の「想い」を相手に伝えるとともに、一方のジュリエットも、その思いの籠もった「接吻」をしっかりと受け止めることになる。もし本当に「いや」ならば、必ず、「いや！」と強く拒絶するはずであるが、それを素直に受け入れることで、ジュリエットは、まさに「恋に深く落ちてしまう」のである。しかし、やがて、ジュリエットも、相手が敵対するモンタギュー家の一人息子（ロミオ）であることを知り、同じように「大きな衝撃」を受けることになるのである。

二、恋に落ちて

さて、ロミオとジュリエットは、キャピュレット家（それは「ジュリエット側」）の「広間」で催された『仮面舞踏会』で、まさに「運命的な出逢い」をすることになる。そして、ロミオは、いわゆる「一目惚れ」によって、まさに「恋に深く落ちてしまう」のに対して、一方、ジュリエットは、手を握られ、二度も唇に接吻されることによって、まさに「恋に深く落ちてしまう」ということである。（もちろん、見た目も当然よかったわけであるが）、この部分の男女の「書き分け」は、やはり「見事」ということになるのかも知れない。つまり、「愛」は、時間をかけて初めて育つものであるが、しかし、「恋」は、一瞬にして訪れ、一瞬にして深く落ちてしまうものである。「恋は盲目」であると言う。それは、「恋」は、まさに「見た目のよさ」（或いは「感覚的なよさ」）から入るものだからである。それゆえ、相手の「内面」（それは「どういう人間であるか？」）は、まさに「盲目」（つまり「見えてはいない」）状態にあるということである。――例えば、まず、相手に心惹かれる、好きになる。しかし、相手は、そうは思ってはいない。その場合、それは、「片想い」であり、一方、相手も自分を好きになる。その場合は、まさに「両想い」であるが、その場合は、やがて、何か「デート」などを行なうことになるかと思うが、ここまでは基本的な「恋の段階」である。そして、デートを何度か重ねていくうちに、相手の「人柄や人間性」なども見えて来る。そして、その相手の「人柄や人間性」などにも強く心惹かれていくのが、まさに「愛」なのである。つまり、「感覚美」（つまり「見た目のよさ」）などに心惹かれていくのが、基本的には、まさに「恋」であり、その「感覚美」に心惹かれ

ていく「恋」から入って、やがて「内実美」（つまり「人間性や諸能力の優秀さ」）などにも心惹かれるようになるのが、まさに「愛」なのである。そして、その「恋」と「愛」とを合わせたものが、まさに男女の「恋愛」になるということである。

三、恋と愛

さて、一般に、「恋」という言葉の定義をすれば、それは、どのような対象であれ、ある対象に「心惹かれている」状態のことであり、それゆえ、それは、何も「男女」に限ったことではなく、この世のありとあらゆるもの、――例えば、人間、動植物、自然、人工物、宇宙、また、趣味、娯楽、賭事（ギャンブル）、遊び、その他、どのような対象であれ、ある対象に「心惹かれている」状態であれば、それらは、すべて「恋をしている状態」と言えるものである。――例えば、ある仕事に夢中になっているとすれば、それは、まさにその仕事に「恋をしている状態」（つまり「強く心惹かれている状態」）であり、また、ゴルフに夢中になっているとすれば、それは、まさにゴルフに「恋をしている状態」（つまり「心奪われている状態」）であり、あとは、その人がどのくらいその対象に心惹かれかつ夢中になっているかによって、それぞれ「恋1」、「恋2」、「恋3」の段階に分かれることになるということである。――つまり、「恋1」は、それなりに心惹かれている状態であり、また、「恋2」は、かなり強く心惹かれているような状態であり、そして、「恋3」は、もうそれなしではいられないほど夢中になっている状態にあるということである。

一方、「愛」であるが、この段階の「愛」は、まだ一般的な「愛」に過ぎない。それは、好きなもの、気に入ったもの、或いは、優れたものを好んで愛する「愛」であり、一方、嫌いなもの、気に入らないもの、或いは、ふつう以下のものは好まない「愛」でもある。それゆえ、この一般的な「愛」は、すべて「自己愛」から生じて来る「愛」である。なぜなら、それらは、すべてその人にとって心地よいもの、或いは、都合のよいものだけを受け入れている「愛」だからである。――例えば、「恋愛」の場合も、自分を「愛している」のか、それとも、相手を「愛している」のかは、極めて難しい問題であり、本来、「愛する」とは、相手を「思いやる心」であり、それゆえ、自分の「思いや欲望」だけを追い求めているのであれば、それは、ただの「自己愛」に過ぎない。相手に「愛情」を降りそそぐこと。それが、まさに「愛」であり、その「愛」は、相手を「思いやる心」であり、自分も大事だが、また、相手も大事だと思う心である。

つまり、一般的な「愛」（或いは「愛情」）というのは、その人の好きな、或いは、気に入っている対象に対しては、好んで「愛情」を降りそそぎ、その対象が嫌いになれば、今度はとかく「冷淡や薄情」になりやすい。また、好きでも嫌いでもないような対象に対しては、ごくふつうに「対応」していくというように、一般的な「愛」（或いは「愛情」）というのは、状況に応じて、絶えず変化していくものである。一方、真の「愛情」というのは、本来、その場限りの安心や安らぎあるいは慰めなどを与えることが、真の目的ではなく、もっと長い目でみて、その対象を「よりよい方向」へと向けていくためにこそ、降りそそがれるものであり、それが、まさに真の「愛情」である。――さらに、真の「愛」というのは、本来、これという特定の対象を持たず、自らを燃焼させながら、あらゆる方向に向かって、人間としての「真実・真理」の光を放つことである。それは、まさに天上

で輝く「太陽」がそうであるように……。

四、月夜の「窓辺」

さて、次は、有名な月夜の「窓辺」の場面であるが、ロミオは、高い「壁」を乗り越えて、キャピュレット邸の庭園へと忍び入り、そして、ジュリエットの部屋の「窓辺」、その「窓辺の所」に出ているジュリエットを見つめている。「……あっ、見ろ、あの女が頬を手の上にもたせかけている！　ああ、あの手を包んだ手袋になりたい。そうしたら、あの頬に触れることができるのに！」。ジュリエットは、「……ああ、どうしたらよいのかしら！」、「……ああ、ものを言った。もう一度ものを言って下さい。私の天使、……」。そして、ジュリエットは、何やら独言を言い始める。それは、余りにも有名な「……おお、ロミオ、ロミオ！　どうしてあなたはロミオなのでしょう！　お父様とは無関係、自分の名は自分の名ではない、とおっしゃってください。それがいやなら、お前だけを愛していると誓ってください。そしたら、私もキャピュレットの名を捨ててしまいましょう」とある。これは、つまり、「……自分が愛した相手（ロミオ）が、よりによって、どうして敵対するモンタギュー家の一人息子（ロミオ）なのでしょう、という問いかけである。それは、敵対するモンタギュー家の一人息子でなければ、どれほどよかったでしょうという思い」に襲われているのである。その後、二人の間でいろいろな「会話」が交わされることになるが、その部分は省略して、最後に、ジュリエットは、「……もしあなたの愛が真面目なものであり、その目的が結婚でございましたら、何とか都合して明日使いの者をあなたの所によこしますから、その者に返事を託してはくださいませんか。どこで、そして、いつ、結婚の式を挙げるかという返事を。その返事が得られましたら、私は自分の運命をひたすらあなたに託し、どんな世界の果てまでもわが良人としてついて参りとう存じます」と言う。ロミオは、それでは、「九時に」ということで、二人は別れることになる。そして、ロミオは、そのまま「修道士ロレンスの僧坊」へと急ぎ、早朝に着く。そして、今日中にどうしても二人が結婚できるようにしてほしいと、お願いするのであった。

その朝、街頭で、二人の友人（マキューシオとベンヴォーリオ）は、「……キャピュレットの親戚のティボルトの奴が、ロミオの家に書面を送ったそうだぞ、きっと決闘の果たし状だろうな、……彼は、決闘の名人だから」と話をしているところに、ロミオが現われ、今度は三人で話をしていると、ジュリエットの「使い」（乳母とピーター）がロミオを訪ねて来る。そこで、ロミオは、「……何とか口実を設けて、今日の午後、懺悔のために家から出るように、行き先はロレンス神父様の僧坊で、そこに行けば、罪の赦免ももらえるし、結婚の式も挙げてもらえるはず」であると告げるのであった。

一方、「使い」（乳母とピーター）の帰りを首を長くして待っていたジュリエットは、三時間後、やっと帰ってきた「使い」（乳母）からすぐにも返事が聞きたいのに、自分のことばかり話す話ぶりにいらいらしながらも、ロミオからの返事を聞いて、ロレンス牧師の僧坊へと急ぎ向かうのであった。そして、ロミオとロレンス牧師とが待っているところに軽い足どりでやって来て、ロミオとジュリエットは、めでたく「結婚式」を挙げることができる。ここまでは、すべて「順調」に来ているが、しかし、もちろん、このまま「幸せ」になれるのではなく、やがて大きな「悲劇」へと向かって行くことになる。

五、喧嘩と追放

それは、街頭で、再び、喧嘩が起こるということである。それは、マキューシオやベンヴォーリオ、それに小姓と使用人等がいるところに、ティボルトとその仲間たちがやってくる。そして、マキューシオとティボルトとが言葉のやり取りから、二人は、まさに「一触即発」状態になっているところに、主人公のロミオがやって来る。すると、ティボルトは、「……君との喧嘩は中止だ。俺の捜している男がきたから」と言い、「……ロミオ、きみはまさに悪党だぞ」と言う。それに対して、ロミオは、「……ティボルト、君に対して好意をもたなければならぬ或る事情があるので、あえて怒らぬことにする。ただ、一言、僕は悪党ではない。さようなら」と応じるが、ティボルトは、「……おい、ロミオ、そんなことを言っても、君が僕に加えた侮辱の言い訳にはならんぞ。さ、引き返して剣を抜け」と言うと、ロミオは、「……誓って言うが、君に侮辱を加えた覚えはない。むしろ想像もつくまいが君を深く愛しているのだ。だから、今のところは我慢してくれたまえ」と言うのであった。すると、マキューシオが、「……おい、私が悪うございましたとよくもおめおめと言えたもんだ！」と言って、剣を抜き、「……おい、ティボルト、ねずみ取りの名人、俺と決闘しようじゃないか」と言う。ティボルトも、「……よし、相手になってやる」と、剣を抜いて、二人は直接闘う展開になる。すると、ロミオは、あわてて止めに入るが、マキューシオは、ティボルトの剣に突かれて死んでしまう。ティボルトとその仲間たちは、その場を逃げるが、再び、戻って来る。ロミオは、親友のマキューシオが殺されたことに激高して、本気でティボルトと剣を交え、ティボルトを殺してしまう。そこに、多数の市民をはじめ、領主、従者多数を連れて登場し、ほかに、モンタギュー夫婦、キャピュレット夫婦、その他が登場して来る。そして、領主が、「……この騒動を最初に始めた不埒者はどこにいる？」と訊くと、ベンヴォーリオが、その「いきさつ」をすべて正直に話す。その結果、ロミオは、ヴェローナから「追放」という処置になってしまうのである。

一方、ジュリエットは、そのことを乳母から聞き、大変な「衝撃」を受けるが、それは、ロミオに殺されたティボルトという若者は、実は、ジュリエットと親しかった従兄であり、しかも、その親しかった従兄であるティボルトを殺したのは、何と愛する良人（ロミオ）であり、さらに、その愛する良人（ロミオ）は、ヴェローナから「追放」という、まさに「二重、三重の衝撃」を受けてしまったということである。一方、ロミオは、取り敢えず、ロレンス神父の「僧坊」に身をひそめている状態であり、そこに乳母が訪ねてきて、ジュリエット様は、部屋に閉じ籠もり、泣いてばかりと告げると、ロミオは、今夜、訪ねていくことをジュリエットに伝えてほしいと頼むのであった。

そして、そのジュリエットの部屋では、ロミオとジュリエットは、二人別れを惜しんでいる状態であるが、最初、ジュリエットは、「……もう行っておしまいになるの？　まだ夜も明けていないのに？　不安に苛立つあなたの耳を今劈いたのは、夜鳴鳥であって雲雀ではありません」と言う。一方、ロミオは、「……いや、あれは確かに暁を告げる雲雀、けっして夜鳴鳥の声ではない」と言う。ジュリエットは、「……あの光は暁の光ではありません。いいえ、私が一番よく知っています。もう暫くここにいてくださいまし。まだ行くには及びません」。「……もしあなたがそれを望むのであれば、私にも言わせていただ

きたい。あそこの灰色は太陽の光の色ではない。また、あの鳥も雲雀ではない。私はここに留まっていたい。死よ、来るならこい、歓迎してやる。――さあ、もっと話をしよう、まだ朝ではない」と言う。これは、一体、何かと問えば、それはもう、一秒でも長く一緒にいたいという二人の心理描写なのである。すると、今度はジュリエットが、「……いいえ、朝です、朝なのです。急いでここを立ち去って！　あの、どきつい、喧しい、劈くような音をたて、調子はずれの声で歌っている、あれこれ本物の雲雀なのです。……」と言う。そこで、ロミオは、ジュリエットに「別れの接吻」（これが「最期の接吻」）をして、縄梯子を降りていく。そこに、キャピュレット夫人が入ってくる。そして、いつまでも悲しんでいてもしょうがないでしょうと。実は、お父様がお前のためにあの「パリス様」と木曜日に結婚式を挙げるように取り計らってくれたのだと告げる。それを聞いて、ジュリエットは、驚くが、そこに父親キャピュレット、乳母が登場し、そして、ジュリエットは、お話はありがたいのですが、結婚はいたしませんと断ると、父親は、激怒して、お前のわがままなどは絶対に聞かぬと、一方的に決めて、出て行ってしまう。そこで、ジュリエットは、何か「いい方法」はないかと乳母に聞くと、乳母は、今となっては、パリス様と結婚されるのが一番の得策ですよと答える。それを聞いて、ジュリエットは、何てひどい人！　「……私はこれから神父様の所に行って、この場をしのぐ策をお訊ねしよう」と出かけるのであった。

六、一つの妙案

さて、「話」（ストーリー）は、ここから、まさに「クライマックス」へと向かって行くことになるが、それは、ロレンス神父の「一つの妙案」が、結果として、ロミオとジュリエットを「悲劇」へと招く「最大の要因」となるものである。それでは、その「一つの妙案」とは、いったいどういうものかと問えば、それは、次のようなものである。――つまり、「……まず、家に帰り、結婚を承諾する。そして、明日は水曜日、明日の夜は、独りで寝て、寝床に入ってから、この壜を取り出し、中に入っている飲薬を全部飲み干す。すると、あなたは、死人と同じような状態になる。その『仮死の状態』のまま、四十二時間過ごし、やがて眼を覚ます。婚礼の朝、花婿があなたを起こしにやってくる頃には、あなたはちょうど死んでいる状態になっている。そこで、あなたは、柩車に乗せられて、キャピュレット家代々の人が眠っている昔からの地下納骨室に運ばれてゆく。一方、わたしは手紙を書いて、ロミオにこの計画を知らせ、あなたが眼をさます頃を見計らって、ロミオも当地に帰って来る。そしてわたしと一緒に、あなたの眼がさめるのを傍で待ち、その夜こっそりロミオがあなたをマンテュアに連れてゆく」というものであった。

それでは、この「計画」の、一体、どこに致命的な「欠陥」　があったのだろうか？

それは、ロレンス神父の書いた「手紙」（つまり「正しい情報」）が、ロミオに正しく届かなかったということである。さらに「悪いこと」には、ロミオの「召使」（バルサザー）という人が、ヴェローナから帰ってきて、「……ジュリエット様は、死んで、地下納骨室に葬られました」という「間違った情報」（つまり「外的事実」だけ）を、マンテュアにいるロミオに届けてしまったということである。それでは、なぜ「手紙」（つまり「正しい情報」）は、ロミオに届かなかったのか？　それは、「手紙」を届けるはずの「ジョン

修道士」は、一緒に行くはずの「修道会」の牧師が見つからず、捜して、やっと見つけると、今度は、その牧師は、病人を見舞っていたが、たまたま悪疫（あくえき）に冒された病人を見舞ったということで、町の疫病（えきびょう）係の役人に、二人とも「家の中」に閉じ込められてしまい、戸外に出ることが禁じられてしまったということである。この「設定」は、少し無理があるように思えるが、しかし、当時は、そういうこともたびたびあったのかも知れない。

七、悲劇へと

もちろん、ここで最も大事なことは、そういうことではなく、いわゆる「情報」が相手に正しく伝わらないこと、或いは、不確かな「情報」が相手に伝わってしまったということである。しかも、その不確かな「情報」をもとにして、ロミオは、すぐに「行動」（つまり「言動」）を始めてしまう。本来であれば、届けられた「情報」の信憑性を厳密に「吟味」する必要性があったかと思うが、しかし、われわれ人間というのは、もちろん、人間からの直接的な「情報」をはじめ、例えば、新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、映画、動画、アニメ、漫画、パソコン、ケータイ、スマホ、タブレット、ツイッター、フェイスブック、その他、実に様々な「メディア」その他からの「情報」などに対しても、それらの「情報」をそのまま素直に受け入れやすいが、しかし、やはり、その「情報」の信憑性は、絶えず厳密に「吟味」され続ける必要性があるということである。なぜなら、その不確かな「情報」をもとにして、ロミオのようにすぐに「行動」（つまり「言動」）を始めてしまうことが、結果として、実に様々な「悲劇」を生むことにもなるからである。それゆえ、何よりも大事なことは、常に、この世の実に様々な「情報」の信憑性を絶えず厳密に「吟味」し続ける必要性があるということである。

さて、ロミオは、まさに不確かな「情報」をもとにして、すぐに「行動」（つまり「言動」）を始めてしまう。それは、若さの最大特徴である、まさに「性急さ」というものである。若い時というのは、多かれ少なかれ、誰でもその場の「乗りや状況」などから、もう前後の見境もなく、すぐに「行動」（つまり「言動」）しやすいものであるが、しかし、大事なことは、よく「考える」という「間合い」（つまり「時間」）を置いてから、何らかの「行動」（つまり「言動」）はすべきであり、反射的に、すぐに「行動」（つまり「言動」）などしなくてもよいのである。――ところが、ロミオは、届けられた「情報」の信憑性を厳密に「吟味」することもなく、すぐに「召使」（バルサザー）に「早馬」を用意させ、しかも、薬屋（くすりや）で「毒薬」まで自ら購入してしまう。つまり、ロミオは、ジュリエットは、うそ偽りなく、完全に死んでしまったと思い込んでいるのであり、その「思い込み」こそは、まさにロミオを「死」へと追いやるのである。それゆえ、それがどういうことであれ、一度は、ほんとうにそうなのか？　疑ってみることは、極めて大事なことであり、「疑う」ことは、むしろ「健全な精神」であり、一方、盲目的に「信じる」ことのほうが、遙かに「危険なこと」になるのである。――それはともかく、ロミオは、「早馬」を走らせて、ジュリエットが眠るという「墓場」（地下納骨室（のうこつしつ））へと急ぎ向かうことになる。ところが、そこには「パリス」も来ていて、やがて、ロミオとパリスとは剣を交えて戦い、そして、ロミオは、パリスを突き殺してしまう。これは、いったいどういうことなのだろうか？　ここには何か「重大な秘密」が隠されているのだろうか？

つまり、なぜ、墓場に「パリス」がいるのか？　また、そのパリスとロミオは、なぜ、剣を交えて戦い、ロミオは、パリスを殺さなければならなかったのか？　この「難題」を考えてみると、それは、次のようになるかと思う。――例えば、もし墓場に「パリス」がいなかったならば、当然のことながら、ロミオは、パリスと戦うこともなければ、ましてやパリスを殺すようなこともなかった。それゆえ、ロミオは、ジュリエットの「亡骸（なきがら）」（正確には「仮死状態」）の前で、「毒薬」を飲んで、自ら命を絶つことになったかと思う。やがて、ジュリエットは、眼を覚まし、ロミオの姿を見て驚き、ジュリエットもすぐに後を追うように自害する可能性は、極めて高い。しかし、誰かに止められるような形で、いくら自害しようと願ってもできないという可能性も少しは残り得る。その場合、つまり、ジュリエットが生き残った場合、ロミオとジュリエットとの「悲劇」というものは、全く成り立たないとともに、いわゆる「純愛」そのものにもなり得ない。さらに、大事なことは、ジュリエットが生き残れば、やがてパリスと結婚する可能性すら出てきてしまう。だからこそ、パリスには、どうしても死んでもらわなければならないとともに、ジュリエットにも、どうしても自ら死んでもらわなければならない。そうでなければ、『ロミオとジュリエット』という「悲劇」（永遠の愛を誓った「二人の純愛」）というものは、そもそも「成立」（つまり「成り立たない」）ことになってしまうからである。

さて、ロミオは、ジュリエットの「亡骸（なきがら）」（正確には「仮死状態」）の前で、「毒薬」を飲んで、自ら命を絶つことになる。一方、ジュリエットは、眼を覚ますと、そこにはロレンス神父が傍（かたわら）にいて、「……夜警がもうすぐここにきます。さあ、早くここから出てください。わたしはもうこれ以上ここにはおれないのです」と言って、退場する。一方、ジュリエットは、ここを離れませんと言って、「……あっ、これは？　恋しい方の手に握りしめられた杯ではないのか？　では、毒薬で自分の命を無情にも断たれたのか！――ああ、意地悪なお方、みんな飲みほしてしまうなんて！　すこしは残すぐらいの親切さがあってもよさそうなものを！――さ、接吻（くちづけ）を、もしかしたら、この唇にまだ毒薬がいくらか残っていて、それが回生薬となって私を死なせてくれるかもしれぬ」と、ロミオに接吻（くちづけ）をし、「……この唇はまだ温かい！」と言う。そして、「……あ、あの人声は、では、急がなくては……ありがたいこと、ここに短刀が……」と言って、ジュリエットは、ロミオの腰の短刀を取り上げて、一突きに胸を刺す。そして、「……お前の鞘はここに。さ、ここで錆つき、私を死なせておくれ」と言って、ロミオの死骸の上に倒れて、死んでいく……。

あとは、どうしてこのような「悲惨な結果」になってしまったかを、駆けつけた人たちに、ロレンス神父が詳しく話をすることになり、そして、対立していた両家も、お互いに相手の「純金の像」（「ロミオとジュリエット」）の像をそれぞれ創って上げましょうということで、仲直りをすることになる。ちなみに、なぜ「純金」かと言えば、それは、百％金だけでできているということは、すなわち、まさに純粋な「心、愛情、愛、そして、永遠に色褪せない」というようなことを、まさに「象徴している」ことにもなるということである。

八、それぞれの人物像

さて、この『ロミオとジュリエット』には、いろいろな人たちが登場して来ますが、そ

の主要な人物の、まさに「人物像」（性格や人間性）などを見てみたいと思う。

まず、主人公（ロミオ）であるが、ロミオは、モンタギュー家の一人息子であり、年齢は、原作では明記されていないが、恐らく、十六歳前後ではないかと推測される。そして、その「人物像」は、次のようなものである。まず、「……ジュリエット側の仮面舞踏会で、ティボルトがロミオの姿を見つけると、すぐに敵意をあらわにするが、その時、家の主人キャピュレットは、まあ、落ち着け。見たところいかにも紳士らしく振舞っているじゃないか。それに、わしも聞いているが、あれは品行といい行儀作法といい、全く申し分のない、ヴェローナ自慢の若者というじゃないか。わたしはこの自分の家であの若者に侮辱を加えたくはない。だからお前も我慢してくれ、素知らぬ顔をしてくれ」と言うのであった。

一方、ティボルトは、「……あんな野郎が客人づらをしているときには、私にはもう我慢できません」と言う。それに対して、老キャピュレットは、「……我慢しろと言っているのが分からんのか。文句があるのか、若造のくせに！　この家の主はわしでなくてお前だと言うのか？　我慢できぬだと！　それじゃせっかくの客人たちを大騒動にまき込もうというのと同じじゃないか！　お前は何もかもぶち壊そうというのか！　そして大きな顔をしたいと言うのか！」と言う。ティボルトは、「……しかし、叔父上、これは大変な屈辱です」と言うと、「……まだそんなことを言っているのか。子供のくせにお前は生意気だぞ、ほんとうに屈辱か？　変なことをしでかしたらお前の身のためにもならんぞ、わしはそのままではすませんからな」と言うのであった。この場面を見る限りでは、老キャピュレットという人は、ことさらに問題を起こすことなどはむしろ嫌っているとともに、血気盛んな若者（ティボルト）にはほとほと手を焼いているという感じになるかと思う。

一方、ティボルトは、「……こう居丈高に怒鳴られて無理に堪忍はしたものの、気持ちが煮えくり返って五体がぶるぶる震えてくる。今度は引き退がることにするが、こんな出すぎた真似をしたからには、俺はあいつを必ず痛い目にあわせてやる」という展開になるのである。――つまり、この血気盛んなティボルトという若者は、やがては問題を起こすことになるだろうということを暗に示しているのである。一方、主人公「ロミオ」という若者は、彼が住んでいるイタリアの都市ヴェローナというその地域の人々の評判では、いわば「ヴェローナ自慢の若者」という設定になっている。そして、近頃は、ロザラインという女性への「片想い」に深く悩んでいるのである。

次に、ロミオには、二人の「親友」がいる。一人は、「マキューシオ」であり、彼は、モンタギューの甥という設定になっている。そして、もう一人は、「ベンヴォーリオ」であり、彼は、モンタギュー家の「喧嘩」の場面でも、「……引け、引け、馬鹿者！　剣をしまうんだ。とんでもないことをしでかしているのが分からんのか」と言い、そこにティボルトも現われ、ティボルトは、「……お前まで剣を抜いているのか。さあ、ベンヴォーリオ、こっち向いてかかってこい」と言うと、ベンヴォーリオは、「……俺はただ町の平和を守りたいだけなのだ。剣をしまってくれ。いやならその剣でおれに加勢してこの連中を引き離してくれ」と言うのであった。これでは、喧嘩にはならない。つまり、喧嘩を好まぬ穏健な性格であるとともに、ロミオのことを親身に心配しているいちばんの「親友」でもあるのである。

一方、ティボルトは、「……なんだと？　抜身をひっさげておいて平和もくそもあるもんか。俺はそんな言葉は大嫌いだ。地獄も、モンタギュー家の奴らも、お前も大嫌いだ。

さ、覚悟はいいか、卑怯者」とある。これは、典型的な「血気盛んな若者」（つまり「気概（激情）的部分」に支配されている若者）であり、それゆえ、その後、ロミオの所に決闘の果たし状？まで送っている。彼は、決闘の「名人」（つまり「決闘にかけては一流中の一流」）という、そういう果敢な「決闘の達人」という設定になっている。その結果として、彼は、ロミオの友人「マキューシオ」と剣を交え傷つけ、死へと追いやる。それに激高したロミオとも剣を交えて、今度は自分の方が倒れて死んでしまうという展開になるのである。この「ティボルト」という若者は、ジュリエットの母親である「キャピュレット夫人」の「甥」（キャピュレット夫人の弟の子供）であり、彼は、心の底から「モンタギュー家」を嫌っているのである。そのために、本気で「マキューシオ」をはじめ、ロミオとも剣を交えてしまうのである。つまり、ティボルトこそは、まさに「事件」（流血事件）を起こす、いちばんの「張本人」の一人になっているのである。

一方、領主の親戚で、ロミオの親友「マキューシオ」も、どちらかと言えば、やはり「血気盛んな若者」（つまり「気概（激情）的部分」に支配されている若者）という設定になっている。だからこそ、ロミオの「……誓って言うが、君に侮辱を加えた覚えはない。むしろ想像もつくまいが君を深く愛しているのだ。だから、今のところは我慢してくれたまえ。今の僕にとっては、自分の名と同じくらいキャビュレットの名は大切なんだ」と言うのを聞いて、マキューシオは、「……おい、私が悪うございましたとよくもおめおめと言えたもんだ！　イタリア式剣術の前に君は降参したというわけか！」と言って、マキューシオは、剣を抜き、「……おい、ティボルト、ねずみ取りの名人、俺と決闘しようじゃないか」ということから、結局、ティボルトと真剣を交えてしまうのである。

＊　＊

さて、その「事件」（流血事件）は、街頭で起こることになる。それは、マキューシオやベンヴォーリオ、それに使用人等がいて、穏健なベンヴォーリオが、「……頼むよ、マキューシオ、僕といっしょに帰ってくれ。外は暑いし、それにキャビュレット家の連中もほっつき歩いているから。もし連中と会いでもしたら、ひと騒動は免れないと思うんだ。こう暑くては、血が頭に上ってみんな何をしでかすか分からないぞ」と言う。これは、いかにも彼らしい「揉め事」を好まぬ性格が表れているかと思うが、そこにティボルトその他（仲間たち）がやって来る。そして、ベンヴォーリオは、「……おい、えらいことになった、キャピュレット家の連中がきたぞ」と言うと、マキューシオは、「……なあんだ、つまらない、構うことはない」と応える。そこに、ティボルトは、「……やあ、諸君、君たちのどちらかと一言話したいのだが」と言うと、マキューシオは、「……一言、もうちょっと何か色をつけたらどうだね、一言と一勝負とか何か？」と返答して、二人は、まさに「一触即発」状態になっているところに、主人公のロミオがやって来るのである。

すると、ティボルトは、「……君との喧嘩は中止だ。俺の捜している男がきたから」と言い、「……ロミオ、君に対しては敬意をもっているので、この程度のことしか言わんが――きみはまさに悪党だぞ」と言う。それに対して、ロミオは、「……ティボルト、こういう挨拶をされたら当然怒って然るべきだが、君に対して好意をもたなければならぬ或る事情があるので、あえて怒らぬことにする。やむを得ぬ仕儀なのだ。ただ、一言、僕は悪党ではない。さようなら、君は僕をよく知らないようだ」と応じると、ティボルトは、「……おい、ロミオ、そんなことを言っても、君が僕に加えた侮辱の言い訳にはならんぞ。さ、

引き返して剣を抜くがいい」と言うと、ロミオは、「……誓って言うが、君に侮辱を加えた覚えはない。むしろ想像もつくまいが君を深く愛しているのだ。その理由はやがて分かる時期がくるはずだ。だから、キャピュレット君、今のところは我慢してくれたまえ」と言うのであった。すると、マキューシオが、「……おい、私が悪うございましたとよくもおめおめと言えたもんだ！」と言って、剣を抜き、「……おい、ティボルト、ねずみ取りの名人、俺と決闘しようじゃないか」と言うと、ティボルトも、やがて「……よし、相手になってやる」と、剣を抜いて直接闘う展開になる。すると、ロミオは、あわてて、「……おい、よせ、ティボルト、おい、マキューシオ、どうした？」という展開になり、マキューシオは、ティボルトに刺されて倒れてしまうが、その時、「……ロミオ、どうして君は俺たちのあいだに割り込んできたのだ？　俺は君の腕の下で刺されたんだぞ」と言う。これは、「……君が割り込んできたから、俺は君の腕の下で刺されてしまったんだぞ。なぜ二人だけで決闘させてくれなかったんだ」ということになるのだろう。そして、マキューシオは、「……意識が遠くなっていくなかで、君たち両家はくたばってしまうがいいや！」というのであった。これは、つまり、両家の対立に巻き込まれて、自分は、こんなことで若くして「命を落とす」ような結果になってしまったからであろう。

さて、逃げ出したはずのティボルトがなぜか再び戻って来る。これは、一体、どのようなことを意味するのかと問えば、それは、恐らく、ロミオと「一対一」で決着を付けておきたかった。――つまり、このまま逃げても、逃げ切れるものではなく、最悪、捕まって「死刑」になるくらいなら、むしろロミオとの「決着」は、何が何でも付けておきたかったということである。――一方、ロミオはロミオで、親友「マキューシオ」を（自分のせい）で殺されてしまったと思って完全に逆上して、理性を失い、それは、「理知的部分」（つまり「知性＋理性＋母体のようなもの」）の支配から、完全に「気概（激情）的部分」に全面的に支配されて、いわば「親友の敵討ち」（つまり「復讐の鬼」）となって、ティボルトと文字通りの「真剣勝負」をしてしまうのである。その結果、ティボルトを刺し殺し、自らは、ヴェローナを追放という処分になってしまうのである。

一方、その話を乳母から聞いたロミオの「幼な妻」（ジュリエット）は、大変な衝撃（ショック）を受けるとともに、わが身の不運を呪って、泣き伏すばかりになってしまうのである。さて、その「ジュリエット」という女性であるが、彼女（ジュリエット）は、まだ十四歳にもならない、それゆえ、世間のことも何も知らない「おぼこ娘」という設定になっている。それゆえ、ジュリエットの身のまわりのことは、すべて「乳母」が面倒を見ていることになるのである。そして、この「乳母」の存在こそは、極めて大事な存在であり、その理由の一つとしては、まさに「ヒロイン」（ジュリエット）の存在を実に生き生きと魅力的に引き立てている存在であるとともに、その理由の二つ目は、いわゆる「ロミオとジュリエット」との、まさに直接的な「橋渡し」（つまり直接の「連絡係」）にもなっている。それゆえ、彼女（乳母）がいなければ、そもそも成り立たない作品でもあるわけである。そして、もう一つは、彼女（乳母）の会話は、実に生き生きとしていて、この『ロミオとジュリエット』という作品の中では、実に「味のある役割」を果たしているのである。しかも、この二人は、非常に仲の良い親子のような関係でもあるのである。

ところで、ロミオの「両親」（老モンタギューとその夫人）という二人の人物は、最初のところで、ロミオのことを心配しているという程度で、その後は、それほどの存在感を

示していない。一方、ジュリエットの「両親」（老キャピュレットとその夫人）という人物たちは、逆に、はっきりとその「存在感」を示していて、特に「父親」（老キャピュレット）という人物は、まず、一人娘（ジュリエット）を非常に大事にしている。それは、一体、なぜかと問えば、それは、まさに「最良の伴侶」（つまり「花婿」）を得て、いわゆる「キャピュレット家」の繁栄とその継続をひたすら考えているからである。そこに、たまたま「パリス伯爵」という身分も家柄もさらに「容姿・容貌」もすべて理想的な好青年が登場して、一人娘の「ジュリエット」と結婚したいと正式に申し出ることになるのである。最初、父親（老キャピュレット）は、まだ十四歳にも満たないからと承諾しかねていたが、従兄ティボルトの死と夫ロミオのヴェローナ追放ということで、泣き伏すばかりの「娘」（ジュリエット）を見かねて、今度の木曜日には、（わがままなどは一切聞かぬ）、何が何でも「パリス伯爵」と結婚するようにと取り決めてしまうのである。

そこで、ジュリエットは、どうしたものかと思い悩んだ末に、ロレンス神父のところに相談に行くことになるが、しかし、それが、結果として、最大の「悲劇」を生む直接の要因となるものである。――というのも、ジュリエットは、四十二時間、まさに「仮死状態」になるという薬を飲むことによって、確かに「パリス伯爵」との結婚は逃れることができ得たが、しかし、一方、ロミオは、心から愛する「ジュリエット」が亡くなったという情報を得て、すぐにも早馬を走らせては、キャピュレット家の昔からの地下納骨室のある場所へと到着し、そこでの「パリス伯爵」との対決を経て、性急にも、仮死状態のジュリエットのそばで、自ら「毒薬」を飲んで死んでしまうのである。

さて、ロレンス神父という人物は、最初は、ロミオの「片思いの悩み」の相談役でもあったかと思うが、しかし、今度のロミオの「懇願」は、長年、敵対する両家の「一人息子」（ロミオ）と「一人娘」（ジュリエット）との結婚を今日にも何が何でもさせてほしいという「心からの懇願」であり、最初は、当然のことながら、ためらっていたが、しかし、やがて、「……二人の結びつきが、結果として、両家の争いを終わらせ、そして、和解への切っ掛けになるかも知れない」と思い直して、それを引き受けてしまうのである。その後、例の「流血事件」とパリス伯爵との「結婚問題」から、ロレンス神父は、相談にやって来た「ジュリエット」に「仮死状態」になるという「飲み薬」を手渡してしまうわけである。この「ロレンス神父」の判断は、果たして正しいものであったのだろうか？　例えば、何も薬など飲ませずに、二人で「駆け落ち」を行なうという方法もあったのではないだろうか？　それならば、二人とも死ぬような結果にはならずに済んだかも知れない。もちろん、それでは、いわゆる「作品」（悲劇）にはならない。――つまり、良かれと思ってやったことが、結果として、最悪の「悲劇」になってしまったということである。それは、まさに「ヴェローナ自慢の若者」（ロミオ）という一人の若者が、その後、様々な出来事の「運命の悪戯」（それは「意志と偶然から成り立っている」）に翻弄されて、最後は、まさに極めて「悲惨な悲劇」で終わってしまうということである。――すなわち、われわれ「人間界」というのは、一つは、まさに「意図的なもの」と、もう一つは、いわば「偶然的なもの」とのこの「二つの絡み」（つまり「二つの組み合わせ」）から成り立っているものであり、そして、この「二つのもの」が実に複雑かつ微妙に絡み合っては、まさに現実の「人間界」というものは、絶えず形成されていくのである。

九、純愛とは

最後に、「純愛」とは何か、という問いに対して、われわれは、一体、何と答えたらよいのだろうか？　まず、「愛」とは何か、という問題であるが、その「愛」（或いは「愛情」）の「種類」としては、例えば、自分の中心にある愛情は、まさに「自己愛」であり、また、家族の間に生じる愛情は、まさに「家族愛」であるが、それには、例えば、夫婦愛、親子愛、兄弟愛、姉妹愛、子孫愛、その他などがあるかと思う。また、仲間意識などから生じる愛情は、まさに「仲間愛」（例えば「同士や友愛や友情」その他など）があり、それは、仕事仲間、趣味仲間、同期生、同級生、チーム・グループ・遊び仲間、親友、友だち、その他などから生じる愛情である。また、好きという感情から生じる愛情は、まさに「恋愛」（或いは「他者愛」）であるが、それには、異性愛、同性愛、ファン心理、また、人間、動植物、自然、人工物、宇宙、その他に対して抱く愛情でもある。また、所属する「社会や地域」などに対する愛情は、まさに「地域愛」であるが、それには、例えば、地元愛、郷土愛、愛校心、愛社心、愛国心、その他があり、そして、人類全体への愛情であれば、それは、まさに「人類愛」になるということである。もちろん、ここでは男女間の「恋愛」ということで考えてみたいと思うが、それは、次のようになるかと思う。

まず、男女の「恋愛」の間で生じる「愛」（或いは「愛情」）の「種類」は、基本的には、一つは、自分を愛する「自己愛」と、もう一つは、相手を愛する「他者愛」（或いは「恋愛」）の、この「二種類」しかない。そして、自分を愛する「自己愛」というのは、基本的には、自分の実に様々な「欲望や感情」などを何らかの形で満たすことによって、何らかの「満足感や幸せ感」などを得ようとするものである。一方、相手を愛する「他者愛」というのは、基本的には、相手の実に様々な「欲望や感情」などを何らかの形で満たしてやることによって、相手に何らかの「満足感や幸せ感」などを与えるということである。あとは、その「自己愛」と「他者愛」との「割合」であるとともに、その「自己愛」と「他者愛」との「割合」というのは、絶えず変化していくものである。例えば、「自己愛」が七分で、「他者愛」が三分の時もあれば、逆に、「自己愛」が三分で、「他者愛」が七分の時もある。――つまり、男女の「恋愛」の関係を大きく「三つ」に分けてみると、一つは、「他者愛」よりも「自己愛」の方がより強い場合があり、一つは、「自己愛」よりも「他者愛」の方がより強い場合があり、そして、もう一つは、二人の「自己愛」と「他者愛」とがより高いところで深く「調和」しているような場合があるかと思う。

まず、「他者愛」よりも「自己愛」の方がより強い場合であるが、この場合は、いわば自己中心型の「愛」であり、どちらかと言えば、自分の「欲望や感情」などを第一に考えるということである。これは、ごく一般的な心の「あり方」ではあるが、「利己的自我」（つまりエゴ）と「利己的自我」（つまりエゴ）とが露骨にぶつかり合えば、実に様々な「揉め事、争い、喧嘩、その他」などは、絶えず生じて来ることになるかと思う。

次に、「自己愛」より「他者愛」の方がより強い場合であるが、この場合は、どちらかと言えば、いわば自己犠牲型の「愛情」になりやすく、自分よりも相手の「欲望や感情」などを優先的に考えるということであり、時には、自分を犠牲にしてまでも、相手の想いを叶えてやろうとするが、ただ、明らかに間違った「他者愛」（或いは「自己犠牲」）は、自分も、また、相手（他人）も、そして、社会をも不幸にする危険性が高いのである。

そして、もう一つは、二人の「自己愛」と「他者愛」とがより高いところで深く「調和」しているという場合であり、この場合は、いわば共存共栄型の「愛」であり、真の「愛」（或いは「愛情」）というのは、自分が幸せであるだけではなく、同時に、相手も幸せであることを望むのである。――つまり、相手を犠牲にしてまでも、自分が幸せになることではなく、また、自分を犠牲にしてまでも、相手を幸せにすることでもない。真の「愛」（或いは「愛情」）というのは、自分も相手も同時に幸せであることを望むのである。それゆえ、自分が幸せであるとともに、相手も同時に幸せである時、初めて、心の底からの「満足感や幸せ感」などが得られるということである。

＊　　＊

それでは、「純愛」とは何か、と、再び、問えば、それは、その「愛」に「不純物」（いわば「不純な心」）などが入り混じらないということであり、それでは、その「不純物」（つまり「不純な心」）というのは、一体、どのようなものになるのかと問えば、それは、一つは、まさに「遊び心」（いわば不純な気持ちで楽しもうという心）であり、そして、もう一つは、まさに「打算の心」（何らかの利害損得その他の心）になるかと思う。それゆえ、何らの「遊び心」も「打算の心」も入り混じらない、百％一途な「愛情」だけで心惹かれ合うようなものこそ、まさに「純愛」であり、そして、男女の「恋愛」の究極の形というのは、やはり「純愛」に極まるかと思うが、それでは、その「純愛」には、一体、どのような「よいこと」があるというのだろうか？　それは、お互い身も心もどこまでも深く溶け合えるような、まさに「一体感」が深く味わえるということである。

最後に、「心中」の問題が残るが、「心中」というのは、確かに、「純愛」の一つの「形式」ではあるが、しかし、それは、真の「純愛」とは言えない。なぜなら、二人をはじめ、その二人に関わる「すべての人たち」を「不幸」のどん底に突き落とす行為に他ならないからである。それゆえ、真の「純愛」というものがあるとすれば、それは、まさに「死ぬこと」ではなく、むしろ「二人で生きる」ことであるが、例えば、『ロミオとジュリエット』の場合でも、若しも「計画通り」にすべてが推移していたならば、ロミオとジュリエットは、「……ロミオがジュリエットをマンテュアに連れてゆく」ということで、そこで「二人幸せに暮らす」ことが、或いはでき得たかも知れない。もちろん、両家の深刻な「確執の問題」は、依然として根強く残るが、しかし、二人が結ばれることで、逆に、両家の深刻な「確執」の雪解けが始まる可能性もゼロではなかった。ロレンス神父は、むしろそれを願ったのである。ところが、そうならなかったのは、結局は、「ジュリエットは死んだ」という「情報」を、そのまま「盲目的に信じてしまった」ために、ロミオは、これで「すべては終わってしまった」という、まさに勝手な『思い込み』によってこそ、最大の「悲劇」を生み出すことになるのである。――つまり、その不確かな「情報」をもとにして、ロミオは、すぐに「行動」（つまり「言動」）を始めてしまった。本来であれば、届けられた「情報」の信憑性を厳密に「吟味」する必要性があったかと思うが、それを「怠ったこと」こそは、まさに最大の「悲劇」そのものなのである。

それゆえ、何よりも大事なことは、この世の実に様々な「情報」などをそのまま「盲目的に信じること」では決してなく、むしろ、この世の実に様々な「情報」の信憑性などを絶えず厳密に「吟味」し続けることこそは、最も大事なことであり、逆に、何らかの不確かな「情報」をもとにして、ロミオのようにすぐに「行動」（つまり「言動」）を始めて

しまうことが、結果として、実に様々な「悲劇」を生み出すことにもなるのである。

＊　＊

身も心も
深く溶け合ふ
純愛かな

「参考文献」

※底本「ロミオとジュリエット」平井正穂訳（「岩波文庫」）
※底本「世界文学全集シェクスピア・ロミオとジュリエット」（「集英社版」）